

リンダウ・ノーベル賞受賞者会議派遣事業
第70回会議参加者アンケート 集計結果

1. 本事業をどのような経緯で知りましたか。(複数回答可)

JSPSのHP	3	
JSPSのメールマガジン(JSPS Monthly)	0	
JSPSからのメールでの案内	1	
所属機関からの案内	2	
所属学会のHP、メールマガジン	1	
過去のリンダウ会議参加者からの案内	1	
日本人研究者からの案内	0	
外国人研究者からの案内	0	
その他	2	

2-1. リンダウ・ノーベル賞受賞者会への参加は有益でしたか。

はい	5	
いいえ	0	

2-2. 上記のとおり回答した理由した理由は何ですか。

コロナ禍にあり、2020年に続き開催されない可能性もあった中、オンラインとは言え、開催されたこと自体が有益であった。

オンライン形式ではあったものの、多数のノーベル賞受賞者の講演を聞き、ディスカッションをする機会をもつことは有意義なものであった。また、同年代の研究者との交流から刺激を受けた。オンライン開催での多少の物足りなさから、現地で参加したいという気持ちがより増した。

参加しないよりは参加した方が有益ですが、やはり現地で参加するよりはかなり質が落ちるように思います。

ノーベル賞受賞者の方々の講演やディスカッションを聴講できたという点では大変有意義でしたが、現地に参加して直接的に参加者と交流を深めることができなかったのは大変心残りです。COVIDの感染状況的に判断が非常に難しい状況でしたが、オンライン開催ではなく、現地開催できるまで延期して欲しかったというのが正直な思いです。

時差の問題がある中でも、ノーベル賞受賞者の皆様の研究に対する熱意や、科学に向き合う姿勢、同年代の参加者の意欲に触れられたことは、対面には劣るとはいえ大変刺激的であり、とても有意義な一週間であった。

3. リンダウ・ノーベル賞受賞者会議に参加して、どのような影響がありましたか。(複数回答可)

学術的な視野が広がった。	4	
通常の国際学会では得られないような助言を受けることができた。	3	
国際的な場で研究活動を行いたい、という希望が強まった。	4	
将来、大学や学会等でリーダーとして活躍したい、という希望が強まった。	3	
共同研究等の持続的な研究交流のパートナーが見つかった。	1	
自身を研究者として受け入れる研究室が見つかった。	0	

4. 他の日本人若手研究者にも本事業への参加を勧めたいと思いますか。

はい	5	
いいえ	0	

5-1. 本事業への申請を検討するにあたり、何か懸念事項がありましたか。

1週間という会期が長い	0	
博士論文の提出予定年度にあたる	0	
指導教員や直属の上司が本会議参加に協力的でない	1	
ラボメイトや同僚が本会議参加に協力的でない	0	
英語能力に自信がない	0	
研究業績に自信がない	0	
本会議の知名度が低い	0	
採用されるまでの競争率が高そう	3	
採用結果が判明する時期が遅い	1	
その他	1	

5-2. 上記の懸念事項をどのように乗り越えて申請を決意したかご記入ください。

「まずは挑戦」という信念の元、不採用となることも覚悟をして、申請を行うこととした。

私はポスドク研究者として応募したと覚えているが、実際に参加する時期にはどのような立場かわからない部分が懸念事項だった。懸念事項を乗り越える要素があったわけではなく、ある程度見切り発車で申請を行った。結果として助教の立場で1週間のオンライン会議への参加ことになってしまい、学内の仕事や研究活動との両立は大変な部分があった。

上司は非常に協力的であり、過去に参加経験のある先輩に助言を頂き、採用されるかどうかに関わらずとにかく申請してみようと決意した。

いくら倍率が高くても申請しないと採用されないの、ダメもとでとりあえず申請した。

6. オンライン上で、ノーベル賞受賞者や他の参加者との交流の機会は持てましたか。

頻繁に交流できた	1	
何度か交流できた	1	
あまり交流できなかった	2	
全く交流できなかった	1	

7-1. リンダウ会議のような研究者の国際的な交流イベントを、オンライン形式によって開催することは、若手研究者にとって有意義だと考えますか。

はい	3	
どちらでもない	2	
いいえ	0	

7-2. 上記のとおり回答した理由および、リンダウ会議参加を通じて、有意義な会議にするために必要だと感じたこと(プログラムの内容や実施方法、スケジュール等)をご記入ください。

オンライン会議のため、集中できる参加時間を確保することが難しかった。海外留学準備が重なってしまったことが原因として第一ではあるが、私のような臨床医としての側面を持つ者としては、日本にいる限りはさまざまな仕事から解放はされず、会議への集中した参加が困難であった。コロナ禍で難しいことだったかも知れないが、JSPSの会議室等を提供して頂けると集中して参加できたかも知れない。

コロナ禍の中、会議の再延期や中止の選択肢があったかと想像できるが、オンライン開催+現地開催への招待というリンダウ事務局の対応は参加者として大変ありがたく感じた。時差の影響があるのは仕方がないとして、周りが許すのであれば研究室活動の休みを取り、リンダウ会議に打ち込むと最大限に機会を活用できると思う。Open Exchangeの大部分が日本時間で遅い時間だったのが少し残念だった。

オンライン形式の会議は、参加敷居が低く、広く浅く見たい人にとっては便利だと思います。ただ、開催地に行かないために、普段の仕事をこなしながらの参加となり、時差もあるため、会議のスケジュールと自分のスケジュールを上手に組むことが求められると思います。

現地開催することが必要不可欠に思います。私は米国からの参加でしたが、米国での業務をこなしながら深夜に会議に時差参加するのはかなり難しかったように思います(アーカイブでの視聴ができるので大きな問題ではありませんがライブ感がないので受ける刺激は薄いと感じます)。また、Networkingなども活用しましたが、ランダムに繋がった(知らない)研究者と4分間会話して人脈を広げられる方は稀だと思いました。再度申し上げますが、現地開催することが必要不可欠に思います。

交通費をかけずに交流が持てることは大変有意義である。また英語で申請書を書きやすい経験になる。一方で、時差を考慮したプログラムを作成する必要がある。今回はヨーロッパとアメリカからは比較的参加しやすい時程だったが、東アジアからはメインの講演が基本的に深夜に行われており、午前中に研究室での作業が必要な日は大変辛かった。深夜2時、3時に行われた講演は、本来理解できるであろう内容であっても集中して聞くことができなかった。例えば、open exchangeのような1:1で議論ができる箇所を各タイムゾーンの昼間に、1日3回設置すれば、体や脳に負担をかけることなく少なくとも1人のノーベル賞受賞者や他国からの参加者と交流が持てる。また、Lectureは録画しておいて、パスワードを知る参加者のみが後日視聴できるようにするなど、改善を希望する。